

ヘブル詩特有の美しい修辞法である「パラレリズム」

●ヨブ記の中にはじめて「ヨブの格言」というフレーズが登場します。「格言」と訳されたヘブル語は「マーシャル」(מִשְׁאָל)で、「箴言、ことわざ、たとえ、なぞ」を意味します。しかし、27章にはそのような意味における内容の記述が見当たりません。また「格言」という訳も、新改訳とバルバロ訳だけがそのように訳しているだけで、多くの聖書では訳出されていません。名尾耕作氏も「「格言」とは、ここでは「箴言」のような意味ではなく、ヨブがこれまで、口ぐせのように言い続けている主張の意味である。」と説明しています。「ヨブがこれまで、口ぐせのように言い続けている主張」とは、神に対して自分は潔白(誠実)であるという主張ですが、その主張の仕方が格言的と言えるのかどうか分かりませんが、実に、美しいヘブル語特有のパラレリズムの修辞法によって記されているのです。その意味では、バルバロ訳の「ヨブは格言を"つかって"」とか、新改訳の「ヨブは格言を"取り上げて"」という訳は十分にうなずけるのです。

●ヘブル詩特有の美しい修辞法である「パラレリズム」を通してヨブの主張を味わってみたいと思います。ちなみに、パラレリズムには三つのパターンがあります。一つは「同義的パラレリズム」で、ある文節と同じ意味する内容を別の語彙を使って言い表します。二つ目は「反意的パラレリズム」で、ある文節とは反対の意味の内容を次節で言い表します。そして三つ目は「総合的パラレリズム」で、ある文節を実節ではそれを補う形で言い表します。27章2~6節の箇所では、一つ目の「同義的パラレリズム」と、三つ目の「総合的パラレリズム」が使われています。それを見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

2 節 【同義的パラレリズム】

私の権利を取り去った神、

私のたましいを苦しめた全能者をさして誓う。

●「私の権利を取り去った」とは、自分の潔白さを訴える権利が神から与えられていたとしても、それに対する応答がないことは実質、その権利を取り去ったことと同じことで、それがヨブのたましいを苦しめているのです。また、「神」(「エール」אֱלֹהִים)も「全能者」(「シャツダイ」יְהוָה)と同義です。特に、「全能者」という語彙はヨブ記の特愛用語です。

3 節 【同義的パラレリズム】

私の息が私のうちにあり、

神の霊が私の鼻にあるかぎり、

●「息」と訳された「ネシャーマー」(נְשָׁמָה)と「霊」と訳された「ルーアツハ」(רוּחַ)は同義です。

4 節 【同義的パラレリズム】

私のくちびるは不正を言わず、

私の舌は決して欺きを告げない。

●「くちびる」と訳された「サーファー」(שָׂפָה)と「舌」と訳された「ラーショーン」(לָשׁוֹן)は同義。

また、「不正」と訳された「アヴラー」(עוֹלָה)と「欺き」と訳された「レミッヤー」(רַמְיָה)も同義です。

5 節 【総合的パラレリズム】

あなたがたを義と認めることは、私には絶対にできない。

私は息絶えるまで、自分の潔白を離さない。

●「あなたがたを義と認めることは、私には絶対にできない」という意味は、もし、彼ら(三人の友人たち)を義と認めることは、自分が潔白でないことを認めることになるからです。ですから、「私は息絶えるまで、自分の潔白を離さない。」と断言しているのです。

6 節 【総合的パラレリズム】

私は自分の義を堅く保って、手放さない。

私の良心は生涯私を責めはしない。

●ヨブが「自分の義を堅く保って、手放さない」のは、彼の「良心」が生涯、彼を「責めはしない」と確信しているからです。

●ヘブル詩の持つこうした修辞法は、単なる技巧的な問題にとどまらず、旧約思想の本質を提示する不可欠な文体です。ところが不思議なことに、この重要なパラレリズムの重要性にはじめて気づいたのは、今から何と200年前のことだったようです。キリスト教会の歴史における「置換神学」は、神の概念を正しく認識することを妨げてしまいました。しかし今や、主なる神はイスラエルを復興させたことで、ヘブル語を復興させました。ヘブル語こそ神の概念(ヘブライニズム)を正しく理解させてくれる神の驚くべき言語なのです。

●これから、ヘブル的視点を外して聖書を読むことはできない時代を迎えると信じます。神のご計画が終わりに近づくにつれて、ますますみことばが開かれ、みことばが回復されていく必要があるからです。それは、「主を尋ね求める者」にのみ開かれると信じます。特に、ヘブル的視点から聖書を読むということを一言でいうならば、「イスラエルという鍵と、ヘブル語の持つ概念」をもって読むということです。日本のキリスト者はこのことにおいてより真剣に取り組まなければならない時代に来ています。今日の日本の教会の多くの教役者(神のことばに携わる人のこと)が伝道至上主義の流れの中で召され、教育されているため、どうしても、働き中心の教会を建て上げようとしてしまいます。教会の土台であるべき聖書に向き合うことに、それほど多くの時間を割くことができないという、ある種の心理的プレッシャーが無意識的に掛かっています。しかし、ヘブル的視点から聖書を読み直すことは、現代における「みことばの飢饉」に対応できる唯一の近道だと信じます。

●「聖書は聖書によって解釈される」という原則は、本来、ヘブル語によってより深く味わうことができます。その基本がパラレリズムという修辞法の中に隠されているのです。このパラレリズムからヘブル語の語彙とその意味のつながりを豊かに学ぶことができるはずだと信じます。